

古い歴史を持ち、独特の文化、民俗があり、豊かな山の資源を基に歩んできた物部。しかし日本が高度経済成長していく時代に逆行するように、多くの山の集落から人が平野部へ下りて行った。山を下りる人は子孫のためにと、代々築き上げてきた石垣の田畑にスギやヒキを植栽して行来。今、住み手がなくなったこの二つの集落も世代を継いで石を積み、土を耕し、水を汲んだ天水田も植林の中にひっそりとその姿を残している。

人々がここで暮らしていた昭和という時代は、もう層をめくることがなく歴史になった中で、時が止まったままになっている。

山から人がいなくなりました。代々語り継がれ伝えられてきた技や知恵や伝承、地名とても大切なものが消えていく。

ほんのわずかな断面だけでも次の世代に伝え残していきたいと思います。

今回、天王・能押・水通に縁のある穴内よしえさん、小笠原謙一さん、安井家の末裔の方にお会いして貴重なお話を伺うことができた。

大和紀代子さんにも深い話を聞かせてもらった。

明石橋

山崎

日山崎神社

戦後まもない頃は山崎小池には50人
くらいの子どもがいてにぎやかだった。
山崎神社は遊ぶ場でもソフトボールが
できる人数がたまたま。お菓子のない所だ
ったので秋はみくりによがて実を食
べて遊んだ。

水涵はタムムの底に求めた消火集落。
水涵前は森林軌道の終点で、
官林署の大規模な製材所が
あり、カヤボミ屋根の集落があり
田畑が段々に広がっていた人の
人が暮らしていた。
製材には暖炉もしく、暖炉の3ど
下にも入らせられたといひ

水通

ここにあり神社は根須
初より安井家の(懸)様とし
祀られている。
神社の西下廻りは 宮ノ下
という客号であった。

大谷

天王・熊押・カキノボ
山麓の集落は人が
いなくなつて消滅し
てしまった。

カキノクボ

大和さんが大坂へ嫁いで
きた昭和40年頃には
能押に人がたくさん

70年くらい前 カキノボ
から熊押に帰る時は
保育の子どもにも5合
だけでも米を背負わせ
母子がいっしょに山を
上がって行った。
それだけ荷物を上げる
のに足が痛くて、

熊押は朝早くから晩まで
日があたって、日当たりが
良かったことだ"るう

水鏡のふはメジロをとりに
この山で遊びまわった。
ある時は道をまちがえて
明改に下りたこともある。
車では少し分遠いが、山
道では意外と近い。

野竹へ

太平山 816m

熊押のはじまりは、都から安井、
という僧侶が来たことがはじまり
といわれている。

神様、仏様、何より子どもと大切にしてくださ
りまして、いまだに子どもを連れて観音堂へ
よがした時、子どもたちは癒れて、ふじく
なっていました。
お供物を持っていたので、神様よりも
おまを神様である孫が大事と、先に
子ども達に与え、お寺の縁側に並んで腰
をかけ、足をぶらんぶらんさせながらお供
物をおいしく食べる姿が、忘れられぬと
話してくれた。
神様は「アカ(がれ)がっりては、い子ども
が、お参りにきてくれたらうんと喜ぶよ」。
今の人はお金で買った遊びに行くが、
子どもにはおおこと新入りの大切さ、大事さ
を伝えたいかん、とも話してくれた。

熊押では場所の良い所に
スギの子(スギの苗)を育て
森林組合へ卸していた。

の跡 30年ほど前に 平家の人たちが各地に
建て替えたことは山村の
くらしに大きな変化を
もたらしたことに違いない。

東熊押

熊押の最初に
来た人が示され
ていともいわれる。

塩釜公土方神社に
合祀されている。
こまいぬがゐる

神社跡

天水田 神江町

天水田は山腹や山頂の平坦地に
拓けられた雨水頼みの水田。
山の平らな山裾を伐り開き、土を
かき集め、造りなして赤土を厚く
敷く。上土を戻して耕土を入れ、雨
を待つ。土が腐って金切り、水田を作
った。水を抜くと底が割れるので
水をためたまま、稲刈は船に乗
りかたで行った。石垣で風雨を防ぐ。跡
がなくなると、

多い日は40人くらい
子どもが熊押から
大橋の小学校へ
通っていた。5分でも
遅れるととまがなく
一人で通学するくらい
規則正しい子どもたち
だった。

大天水田跡

倒休多く
荒れていて
通行困難

スギは水を
吸う。
谷の水がない
と、スギは死んでしまう。

西能押

熊坪にとって水は大変貴重なものだ。谷にコンクリートの水櫃があり、そこから各家は水を汲みにきていたという。家の軒の雨水も大事に使っていた。今、あたり前のように水道から水が出る暮らしをしているが、水は何よりも大切なしなくてはならぬ資源だと思う。水汲みは大変な重労働だった。同じくはないでね。(くさやま)

大変珍しい丸内姓。
物部の丸内氏の始まりは
九州から白装束の行者が
果て「フルツクの隠し声のする
高い所」に入幡旗を祀る」
とい熊押に示していた。
社はなく大岩と神がみた
今は大折湖湖畔に
丸内八幡として祀られ
ていいます。

山の暮らしにはいろ
秩序があり、お互い
支え合い、助け合

バイク道は幅員も
広く、しっかりに道
板の集落までバイ
で郵便配達に行
くことができた。

平家、森

天

須賀神社

造りの社
は王の祭、

きやかて
くさん出て

石が

た。

林の中のあじろ石垣に
 飲む。人の手で一つ
 一つずつ、こつこつこつ
 積み上げている。
 と守り、田畑を拓き
 来を思い描きながら
 族を思いながら積
 上げたことだろう。

皇が敵と
 たという誤りもある。
 かる越知町
 の形やΩ形に
 ぶくほど笑ふ
 かに之からたぞね 人間歩ま

50.153
024.7.15
+ 0